



のうりん すい さん だい じんしょう
農林水産大臣賞

さい後のおにぎり

埼玉県さいたま市立大谷場小学校三年

桂木 花音

「さい後に1つだけ残ったおにぎり、本当は私が食べたいけど、ヤーヤにあげるよ。」

私は目の前の金ぱつの女の子におにぎりをわたした。かの女はおにぎり大好きで、私の家で遊ぶ時は、おやつにおにぎりが出てくるのを知っていて、よく私の家に来たがる。でもわたしもヤーヤに負けないくらい、おにぎりが好きなので、さい後の1つをめぐってよくケンカになるのだ。でも今日はとくべつだ。今日遊んだらヤーヤとはずっと会えなくなる。私は来週アメリカの生活を終えて日本に本帰国する。さい後にわたしたおにぎりには、「おにぎりといっしょに私のこともおぼえていてね」という気持ちを抱きこめた。

日本からアメリカにわたって、はじめはとても大

変だった。言葉が分からないから友達たちも作れない。そんな時ヤーヤは、わたしがランチタイムに持ってきたおにぎりを見て、話しかけてくれた。何と言っているのか分からなかったけれど、家に遊びにきてくれることになった。そう、おにぎりが友達たちを運んできてくれたのだ。

アメリカでのランチはピザやパスタが多い。それもおいしいけれど、私はもつとお米が広まればいなど思っている。お米はけんこう的だし、お米を食べると勉強にも集中できる。アメリカではスシは人気だけど、高いからみんな時々しか食べない。もつとたくさんの人が、気軽にお米を食べることができるようにおにぎり屋さんが街中にできたらいいな、と思う。

もしおにぎり屋さんができたら、ヤーヤはおにぎりを食べながら、私のことを思い出してくれるだろうか。私はいつか、また会えることを信じて、今日もバクバクとおにぎりをほおぼる。アメリカ生活を支えてくれたお米これからもずっとよろしくね。